

説教題：「**主を待ち望む**」

聖書箇所：マラキ書3章1節（1499頁）、テサロニケの信徒への手紙 I 1章1-10（374頁）

説教者：秀島行雄牧師 招詞：讚美歌93-1-14 交読詩編：詩編119編89-96節（136頁）

讚美歌：83/492（み神をたたえる心こそは）/236（見張りの人よ）/81（主の食卓を囲み）/27

「今週の聖句」〔…どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ…わたしたちを救ってくださるイエスです。〕（テサロニケ前書1：10）

「牧師室の窓」 「準備せず立冬の時を迎えたり瓦礫のガザに食は乏しき」

「北国の雪便り聞き教会の礼拝の朝の雪かき思う」

(1)皆様おはようございます。昨日から11月が始まりました。私は天気予報を見るのが好きです。日本列島の天気予報を見て各地の人々の生活や教会のことを想像します。愈々、雪の季節になります。

学生時代に通いました私の母教会では、11月から3月までは雪の季節です。日曜日の朝早くに教会に行き、牧師と共に私が出来る作業を見つけるのです。例えば、大きな石油ストーブに火を入れ、教会の前の道路の雪かきをして、礼拝の15分前には着席しました。ガラス窓の外に粉雪が自由自在に舞い上がっています。人生とは何か、自由とは何か、粉雪が問い掛けていました。

今年のゴールデンウィークから始めましたエフェソの信徒への手紙全6章は半年間かけて10月に読み終わりました。本日から、テサロニケの信徒への手紙Iを読み進めて参ります。テサロニケの信徒への手紙Iは発音が長いので、省略してテサロニケ前書とも呼びます。

テサロニケ前書は全部で5章に亘って記されています。始めの1章1節には「恵みと平和が、あなたがたにあるように。」と書き始められています。最後の5章の17節には〔(5:17)絶えず祈りなさい。〕と書かれています。「恵みと平和」が何故「絶えず祈ること」になるのでしょうか。

そのことの謎解きが今回のテサロニケ前書を読む主題・テーマになります。この謎解きが皆様にとってどの様になるのかお楽しみ下さい。

1つのヒントを申しあげますと、謎解きには、算数の面積・角度計算や風景画の構図を描く時の様に、「補助線を引く」ことが大切です。「補助線を引いて考える」と言うことは、日常生活で様々な問題に右往左往する時にも応用することが出来ます。パウロはテント造り職人・技術者です。問題が発生したら様々な工夫をして解決しようとした人物です。解決すべき問題を書いて整理し、補助線を引いて解決を図る、頭の中だけで考えても、頭の中に消えてしまうだけです。

聖書を読む時も、聖書の話聞く時にも、補助線を引いて御言葉に親しんで下さい。

(2)扱って、今回のテサロニケ前書のテサロニケとは場所の名前です。聖書の一番後ろに地図帳がありますのでご覧下さい。地図帳の8頁「パウロの宣教旅行2, 3」或いは、隣りの9頁「パウロのローマへの旅」に記されています。現在のギリシャ共和国の第2番目に人口の多い都市です。ギリシャの首都アテネから約300km北にあります。地中海の中でもエーゲ海に面した港町として、政治的にも、パウロの時代に重要な都市として栄えていました。使徒言行録17章節には「ここにはユダヤ人の会堂があった」と書かれており、多数のユダヤ人が住んでおり、パウロはイエス・キリストを宣べ伝えていきました。

ところで、パウロたち一行は聖書巻末の地図8頁に矢印で移動状況が示されている様に、現在のトルコ共和国となっているトロアスから船に乗ってヨーロッパに渡り宣教活動をして行きました。宣教の場所・舞台がエルサレムから小アジアを經由してヨーロッパのギリシャへと広がってゆくのです。使徒言行録16章にはエーゲ海を船で渡って行こうとするパウロの心境が記されています。僅か5節の文章ですが、悩み塞ぎ込んでいたパウロの心に明かりが燈されて決断する様が、こ

の僅か5節に書かれています。私も何かに悩んでいる時はこの使徒言行録第16章の「マケドニア人の幻」の場面を読み返します。皆様も是非ともご参考になさって下さいませ様にとお勧めします。

(3) 続きまして、このテサロニケ前書はパウロ自身が西暦50年頃に書いたであろうと推測されています。西暦50年頃とは、イエス様が十字架の刑で処刑されてから約20年が経過した時期です。新約聖書の中で最も早い時期に書かれました。一方、4つの福音書の中で最も早く書かれたと考えられるのはマルコによる福音書です。西暦65年～70年頃と考えられます。新約聖書を読む機会もなく、パウロはキリスト教を伝道して行ったのです。このことから、パウロと言う人は物事の本質を的確に捉えて、行動することが出来る人物であると理解できます。ですから、このような時代背景を理解して、このテサロニケ前書を読むことは重要であります。ましてや、イエス・キリストの生前の姿を見ていない、イエス様の声を聞いたことがないパウロがどの様な思いで、このテサロニケ前書を書き進めたのでしょうか。

(4) 早速に、テサロニケ前書の1章1節を読んでみましょう。〔(1:1)パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。〕パウロがテサロニケ教会に対して懸命に伝道をしていたことがこの一文から伝わってきます。懸命に、または、「身を粉にして」、四文字熟語で言えば「粉骨砕身」です。

…私事ですが、私はある時に出向を命じられて、著名な会社の財務部門の責任者になりました。銀行からの借り入れが全くない無借金会社です。その会社のトップの方から「しっかりと働いてくれ、身を粉にして、粉骨砕身で頼む」と言われました。懸命に働くことは慣れていましたが、改めて、私の為すべき仕事を心に刻みました。

…1節に書かれているパウロの言葉「父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ」、この言葉から、テサロニケでの伝道活動にパウロが懸命であったことが伝わってきます。心血を注ぎ、愛情を注いだテサロニケ教会員に対して「恵みと平和が、あなたがたにあるように」と伝えているのです。そのことが2節には「祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして」と書かれています。1回2回の単発的な内容ではなく、祈りの中に組み込まれていることを示しています。3節には祈りの中で、祈りの対象となるテサロニケ教会の人々の様子が浮き彫りにされています。3節の中にある言葉に注目してみましょう。「信仰による働き」「愛の労苦」「希望による忍耐」この箇所は重要です。キリスト教には人間社会とは異なる判断基準があるのです。この原理をエンジンとしてテサロニケのクリスチャンが日々の生活を営んでいることが理解できます。パウロが手塩にかけて伝道を重ねてきた結果がテサロニケ教会で育まれて来たのです。パウロが書いた他の手紙では強く叱っている様な言葉はこのテサロニケ前書には書かれておりません。

(5) では、どの様に書かれているのでしょうか。4節5節を見てみましょう。〔(1:4)神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。(1:5)わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。〕この5節でパウロが伝道の言葉だけではなく「力と、聖霊と、強い確信とによったからです」と言っている様に、人間と神と聖霊との一致協力による総合力が発揮されたのです。

従って、「わたしの福音が…伝えられた」のではなく、「わたしたちの福音が…伝えられた」のです。その起爆力になったのが6節に書かれている「聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ」ることでありました。この場合の「御言葉を受け入れ」とは、えり好みをしたり、条件を付けたりすることではありません。この6節には〔(1:6)…御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして

主に倣う者となり」と書かれていますね。人間は身近に見本となる人がいて、自分がその人を真似る「倣う」ことが出来る人は幸せであると私は思います。みんながみんな、身近に真似をしたい人がいる訳ではありません。そういう意味では聖書を読めば、聖書には様々な人間像が描かれており、神の声に耳を傾けることが出来るようになってきます。

考えてみて下さい。世の人々には「聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ」ることなどは全く馬鹿馬鹿しいことかもしれませんが、クリスチャンにとっては導きの言葉であり、歩くことの助けとなる杖にもなるのです。皆様ご存じの様に、四国88か所をお参りする「お遍路さん」はお大師さんと共に歩く「同行二人」の日傘を被り、杖を手に持ち道を歩いてゆくのです。お遍路さんの同行二人は馬鹿々々しいお話しではありません。教会ももっと声を併せてこの6節にある「御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり」と世の人々に伝えなければならないと、私は思います。

(6) 7節には〔(1:7)…すべての信者の模範となるに至った…〕、そして、8節には〔(1:8)主の言葉があなたがたのところから出て…響き渡ったばかりでなく、…信仰が至るところで伝えられている…〕と書かれています。実に興味深い言葉ですね。「響き渡る」そして「信仰が至るところで伝えられ…る」、この2つの箇所は知識や書物の伝達からは起きることはありません。人間の熱意と情熱の躍動から生じてくるのです。私は思うのですが、この様な箇所をテーマにして、東京教区や北支区での祈祷会や学習会などで行なえば様々な意見の交換会となるでしょう。教区や支区には「自由闊達さ」が少ないと感じています。

9節の後半にある〔(1:9)…あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、〕これも意見交換会には最適のテーマであると思います。日本人の悪い癖は自分の殻に閉じ籠もってしまいがちです。殻に閉じ籠もらずに、一言でも、二言でも話し合い、神の言葉を伝えるところが教会であると思うのですが、皆様は如何でしょうか。

きょうの聖書箇所の終わりの10節見てみましょう。〔(1:10)更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。〕ここには、偶像に取り囲まれた私たちに救い主が送られてくる、救い主を待ち望むことが記されています。

きょうの聖書箇所として、旧約聖書のマラキ書をお示しいたしました。旧約聖書は全部で39巻あり、その最後がこのマラキ書です。主なる神の言葉が記されています。〔(マラキ書(3:1)…わたしは使者を送る。…あなたたちが待望している主は／突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者／見よ、彼が来る…〕約束の言葉が記されています。この約束は実現するのです。今月の第5日曜日、11月30日から待降節・アドベントに入ります。いまから心の準備をいたしましょう。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちはあなたの御恵みによって生かされていることに感謝いたします。人生の辛い日々にも、安らかな時にもあなたに向かって祈ることが出来ます様にお支え下さい。神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・平和・希望が与えられますように。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン